

令和7年度

戦跡めぐり

—海軍南飛行場周辺の戦争遺跡を中心に—



日時:令和7年6月21日(土)

主催:石垣市教育委員会文化財・市史編集課

講師:大田 静男

目次

1 戦跡めぐりルート.....	1
2 石垣島における主な戦争関連の出来事(年表).....	3
3 八重山における戦争について.....	4
4 戦争遺跡について.....	6
5 ルート上の各戦跡について	
(1)海軍南飛行場跡.....	7
(2)真栄里海岸の銃眼跡.....	8
(3)真栄里宮島トーチカ跡.....	9
(4)旧大浜村の忠魂碑.....	10
(5)旧大浜国民学校.....	11
(6)大浜海岸の銃眼跡.....	11
(7)フルスト原の海軍壕群.....	12
(8)フルスト原の無蓋掩体壕.....	13
(9)石垣島事件.....	14
(10)八重山戦争マリア犠牲者慰霊之碑 ・八重守之塔.....	15
(11)米軍飛行士慰霊碑.....	15
(12)石垣島海軍警備隊聖観音.....	16
(13)旧登野城尋常高等小学校の奉安殿.....	17
(14)八重山旅団司令部跡.....	17
(15)大浜の掩体壕.....	18
6 おわりに.....	19

1 戦跡めぐりルート

①海軍南飛行場跡(石垣市役所)

②真栄里海岸の銃眼跡

車中説明 真栄里宮島トーチカ跡

③大浜村の忠魂碑、大浜国民学校跡地

車中説明 大浜東海岸の銃眼跡

④フルスト原の海軍壕群

車中説明 フルスト原の無蓋掩体壕

⑤海軍警備隊本部跡(石垣島事件)

— 昼食(パンナ公園南口) —

⑥八重山マリア犠牲者慰霊之碑・八重守之塔

車中説明 米軍飛行士慰霊碑

⑦石垣島海軍警備隊聖観音碑

車中説明 登野城尋常高等小学校の奉安殿他

⑧大浜の掩体壕

テーマ 海軍南飛行場跡周辺の戦争遺跡と石垣島事件

石垣市教育委員会文化財課では、令和7年3月に、海軍南飛行場の防御施設と考えられる「真栄里宮鳥トーチカ跡」の発掘調査報告書を刊行しました。それに伴い、今回の戦跡めぐりでは、同遺跡に触れながら飛行場跡周辺の戦争遺跡(海岸の防衛線、飛行場に付属する弾薬庫や格納庫などの施設)を見学し、当時の飛行場の整備や補修に地元住民や朝鮮人労働者が動員されるなど、戦時下の状況を知り、戦争について考える機会とすることを目的としました。

また、八重山の戦争における大きな出来事のひとつ「石垣島事件」についても、最近の情報を取り入れながら紹介していきます。



2 石垣島における主な戦争関連の出来事(年表)

1933 年（昭和 8）平喜名に海軍の簡易飛行場建設

1937 年（昭和 12）日中戦争はじまる

1941 年（昭和 16）太平洋戦争はじまる

1943 年（昭和 18）

- 1 月 海軍北飛行場（平喜名飛行場）の拡張、海軍南飛行場（平得飛行場）の建設
- 12 月 重要戦時資材として鉄・銅・鉛などを各家庭から回収、桃林寺の梵鐘も重要戦時資材として供出

1944 年（昭和 19）

- 3 月 22 日 南西諸島防衛のため、第 32 軍が編成される
- 5 月 11 日 宮崎武之少将が独立混成第 45 旅団長に就任、先島群島守備担任となる
- 6 月 22 日 宮崎旅団長宮古島に着任
- 8 月 23 日 独立混成第 45 旅団石垣島へ移動、旅団司令部を県立八重山農学校に設置
- 8 月下旬 陸軍白保飛行場完成
- 10 月 10 日 米軍艦載機による南西諸島全域空襲
石垣島も米軍艦載機による初めての空襲を受ける

1945 年（昭和 20）1 月 3 日～3 月末

- 米軍機による空襲 20 回以上
- 第 45 旅団は「乙号戦備」を下命、駐屯部隊は、陣地の構築を加速、住民の避難壕（防空壕）構築も本格化
- 第 32 軍は、米軍等の主な攻撃目標は沖縄本島が 70%、宮古島 30%であり、石垣島への侵攻の可能性は小さいと想定、先島守備部隊の配置は宮古島が約 3 万人、石垣島は約 1 万人
- 石垣島駐屯の守備部隊は航空基地の守備を主な任務とし、於茂登岳などの山岳地帯を利用した遊撃戦を想定し複郭陣地を構築
- 3 月 26 日 英国太平洋艦隊も南西諸島への空襲に加わる
- 4 月 15 日 石垣島海軍警備隊により米兵捕虜 2 名斬首、1 名刺殺（石垣島事件）
- 5 月 30 日 第 32 軍が首里城の司令部を放棄し沖縄本島南部へ撤退
宮古を含む先島守備隊が第 32 軍の指揮下から第 10 方面軍（台湾軍）直下となる
住民の強制避難始まる
- 6 月 10 日 第 45 旅団が「甲号戦備」を下命、旅団司令部を於茂登岳へ移動
- 7 月～8 月 台湾への疎開船が米軍機の機銃掃射を受け尖閣諸島に漂着（尖閣列島戦時遭難事件）
- 7 月 23 日 第 45 旅団は、「甲号戦備」を解除
- 8 月 住民への避難命令解除
- 9 月 7 日 南西諸島の日本軍、無条件降伏文書に調印、南西諸島における戦争が公式に終結
- 10 月 6 日 米軍海兵隊が石垣島に進駐、日本軍の軍事施設を爆破、武器は海中に投棄
- 11 月 本土から派遣された将兵の復員事務開始

1946 年（昭和 21）

- 1 月 復員事務が完了

1947 年（昭和 21）GHQ への投書により石垣島事件が発覚

1948 年（昭和 22）井上乙彦海軍警備隊司令他 6 人に死刑判決下る

3 八重山における戦争について

1941(昭和 16)年に太平洋戦争が勃発、八重山では 1942(昭和 17)年に西表に守備軍が配備され、1943(昭和 18)年から飛行場の整備・建設が進められました。この時期に配備された陸海軍兵は約 1 万人に及ぶとされています。

軍の配備で人口が増えると、次第に食糧供給が困窮しはじめました。1944(昭和 19)年 10 月以降、空襲が戦争終結まで連日のように続くようになると、本島や台湾からの供給も困難となりました。

地元住民は飛行場用地に土地を接収され、労働力として徴用された他、食糧や馬車なども供出させられました。一部の年寄、女、子どもは台湾へ疎開しましたが、疎開途中で米軍機の攻撃を受け遭難、数十人の犠牲者を出した「尖閣列島戦時遭難事件」も起こりました。

また、地元住民以外にも、空港建設等のために連れて来られた朝鮮人労働者や、兵隊むけの慰安婦として連れて来られた朝鮮や本土の女性達もいたことがわかっています。

1945(昭和 20)年 6 月 1 日、軍は住民に対し 6 月 10 日までに指定避難地への退去を命令しました(強制退去)。その避難地がマラリアの有病地帯であり、山中で食糧の確保もさらに困難、小さな避難小屋にぎゅうぎゅう詰めといった高温多湿で不衛生、劣悪な環境であったことが、さらなる悲劇をもたらしました。八重山では沖縄本島のような地上戦は行われませんでした、マラリアに 16,884 人が罹患、3,647 人が死亡しています(他に空襲や艦砲射撃などで 178 人が死亡)。このことは「戦争マラリア」の悲劇として語り継がれています。

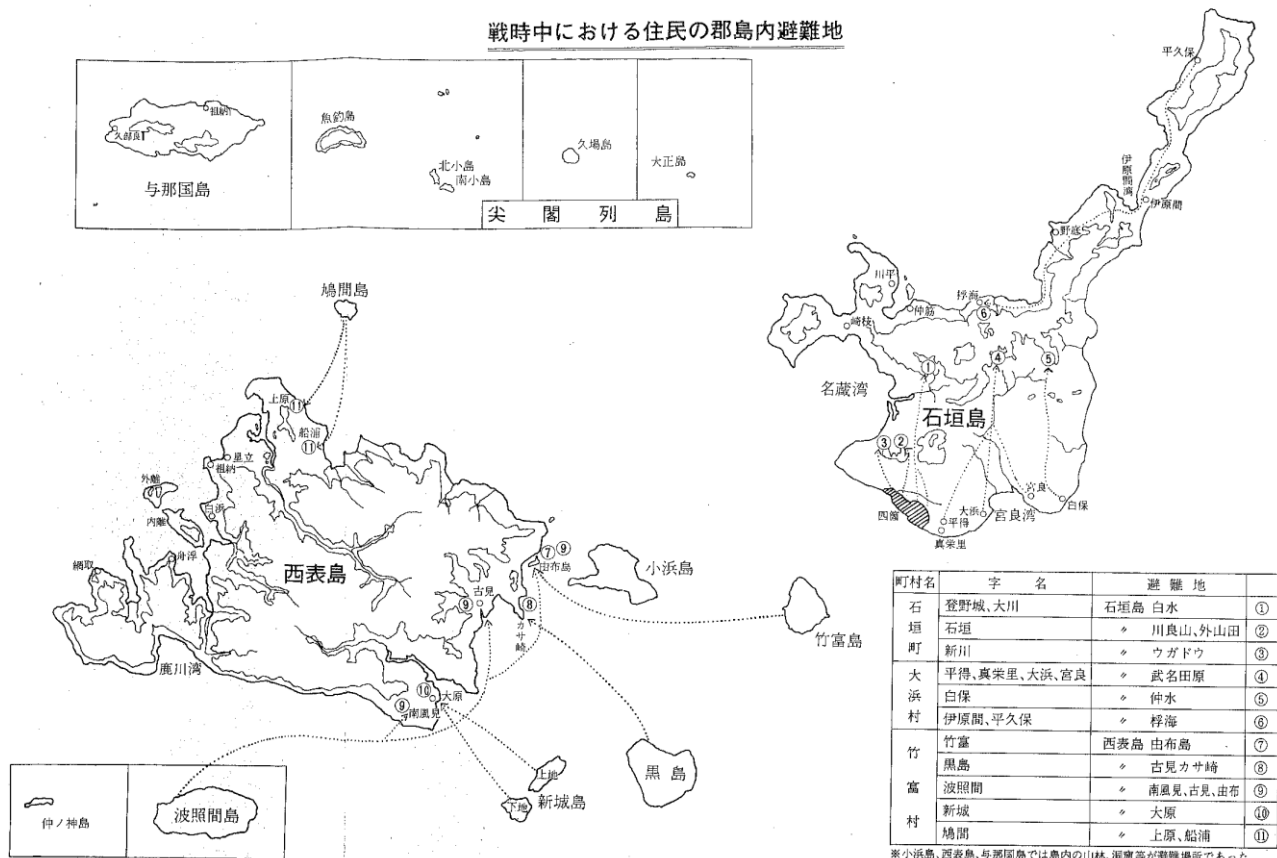
石垣島住民のマラリア死亡状況

町村名	部落名	罹患患者数	死亡者数	死亡率
石垣島	登野城	1,760	633	35.97
	大川	891	226	27.60
	石垣	1,017	149	13.47
	新川	1,390	373	41.86
	川平	72	7	9.72
	計	5,130	1,388	27.06
大浜村	平得	613	264	43.07
	真栄里	239	88	36.82
	大浜	1,805	479	26.54
	宮良	901	107	13.00
	白保	1,184	169	14.27
	開南	27	0	0
	川原	44	0	0
	川辺	45	1	2.22
	伊原間	57	0	0
	平久保	15	0	0
	計	4,930	1,108	22.59
合計		10,060	2,496	24.81

竹富島外島住民のマラリア死亡状況

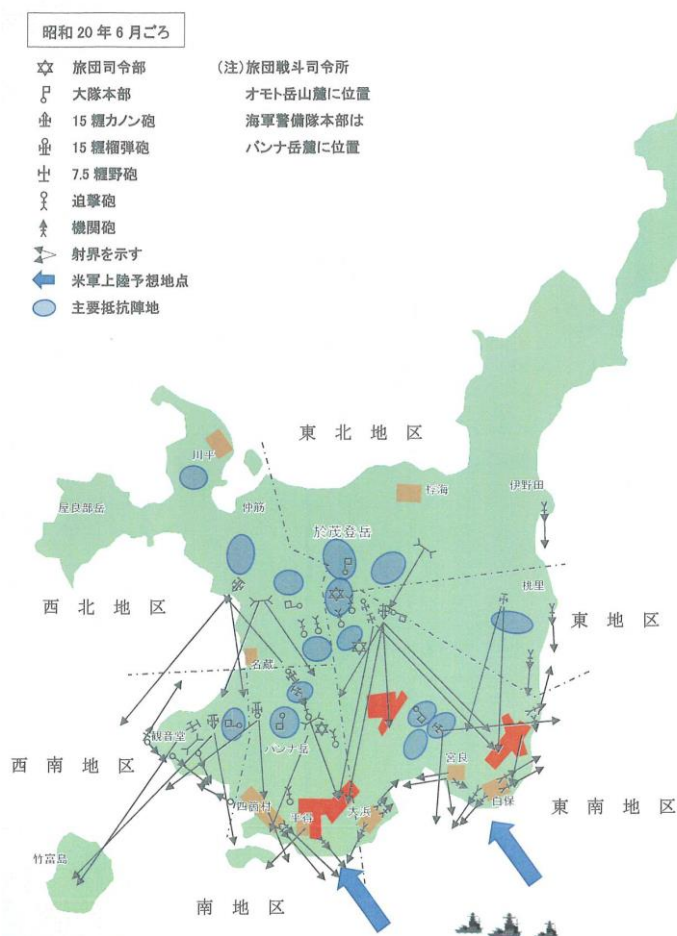
村名	島名	部落名	罹患患者数	死亡者数	死亡率
竹富村	竹富島	竹富	77	7	9.09
	小浜島	小浜	862	124	14.38
	黒島	黒島	128	19	14.84
	新城島	新城	144	24	16.67
	波照間島	波照間	1,587	477	30.05
	鳩間島	鳩間	526	59	11.21
	西表島	古見	23	5	21.74
		南風見	164	21	12.8
		西表	98	6	6.12
		白浜	25	25	100
		丸三	19	18	94.73
		小計	339	75	22.12
	計		3,663	785	21.43
与那国村	与那国島	祖内	1,757	203	11.55
		髭川	473	13	2.75
		久部良	941	150	18.81
	計		3,171	366	22.59

戦時中における住民の郡島内避難地



『市民の戦時・戦後体験記録 第三集—あのことわたしは—』(石垣市市史編集室)より

石垣地区陣地配備要図



『石垣島防衛戦史』(瀬名波栄)をもとに作成

4 戦争遺跡について

戦争遺跡とは「近代日本が戦争に関与した結果として国内外に存在する構造物や遺構、跡地」と捉えられています。沖縄県内の戦争遺跡については、沖縄県が、2004(平成16)年に分布調査、2010～2014(平成22～26)年度に詳細確認調査を行っており、種別を(1)飛行場、(2)司令部壕、(3)陣地、(4)特攻艇秘匿壕、(5)学徒隊壕、(6)病院壕、(7)官公庁壕、(8)御真影奉護壕、(9)住民避難地、(10)偽陣地・偽兵器、(11)被災・破壊痕跡、(12)収容所に細分しています。

昨年、那覇市の第32軍司令部壕が沖縄戦の戦争遺跡として初めて県の史跡に指定され話題となりましたが、実は戦争遺跡として最初に県指定史跡となったのは石垣市の「海底電線陸揚室跡(2021(令和3)年指定)」です。他に県内の市町村で文化財に指定されているものは27件あり、石垣市では「旧登野城尋常高等小学校の奉安殿」、「名蔵白水の戦争遺跡群」があります。

石垣島には戦争遺跡が70か所確認されています。戦後80年を経て、壕などは崩落の恐れのあるものや、既に現地に無くなってしまったものもあります。戦争の記憶、痕跡が薄れつつある現在、こうした戦争遺跡についても今後どのように保存していくべきか、皆で考えていかなければなりません。



旧登野城尋常高等小学校の奉安殿



海底電線陸揚室跡(電信屋)



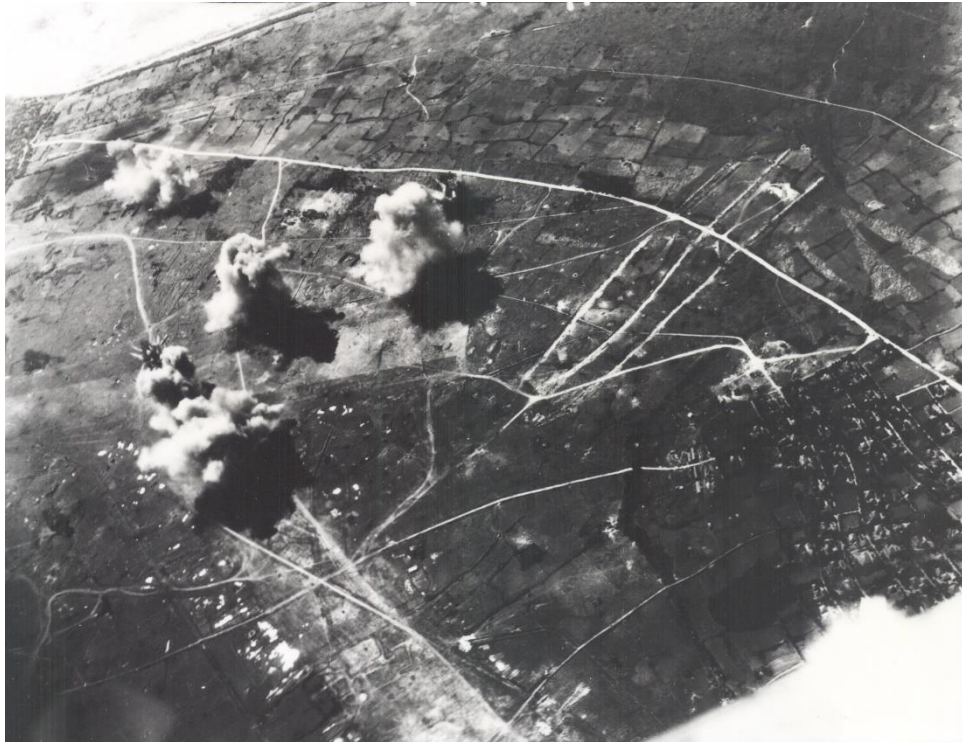
名蔵白水の戦争遺跡群

5 ルート上の各戦争遺跡について

(1)海軍南飛行場(平得飛行場)

石垣市役所とその周辺は、旧石垣空港として 2013(平成 25)年まで利用されていましたが、その前身は、太平洋戦争時に建設された海軍南飛行場(平得飛行場)でした。

石垣島では 1933(昭和 8)年に小型機用の簡易飛行場として平喜名飛行場が建設されました。1943～1944(昭和 18～19)年にかけて海軍南飛行場・白保陸軍飛行場の建設と平喜名飛行場の拡張が行われ、のちに平喜名飛行場は海軍北飛行場と命名されました。



爆撃を受ける海軍南飛行場と大浜村(1945 年 4 月 13 日撮影)沖縄県公文書館所蔵

海軍南飛行場用地の確保は 1943(昭和 18)年から始まりました。ほとんどは農耕地で、地主は 134 人に上りました。しかし軍事上の機密を理由に、関係町村長や部落会長など代表者少人数に向けて八重山警察署内で説明会がもたれただけで、軍の一方的な指示により村役場で書類が作成され、土地代金も 2 割現金、8 割強制預金の証書で支払われ、地主の意見は無視されました。

建設は、本土の土木業者「原田組」が請負い、朝鮮人 600 人余りが強制労働させられ、ダイナマイトを使用するような危険な作業に従事しました。また、多くの地元民も 60 歳未満が男女問わず徴用され、土砂運搬用の馬車なども供出させられました。

また、飛行場建設のため徴用された沖縄本島住民が帰途の際に遭難し、500 人の犠牲を出しました。

飛行場には南西諸島海軍派遣航空隊(第二〇五海軍航空隊)第二石垣航空基地が駐屯しました。



爆弾が飛行場に投下される様子(1945 年 4 月 16 日撮影)

(2) 真栄里海岸の銃眼跡

太平洋戦争時、日本軍は、敵の上陸を島の南側からと想定し、防御のための施設を構築しました。真栄里や大浜の海岸では琉球石灰岩の段丘を利用して多数の銃眼や塹壕などが造られました。現在、真栄里海岸には銃眼が4か所残っています。

八重山旅団の「八重山列島防衛指導大綱」によれば、「水際戦闘。特設水中攻撃隊を以て特攻艇隊の挺侵攻を支援し、敵上陸に際しては海岸洞窟、さんご礁小起伏を利用する果敢なる遊撃戦により、敵に最大の打撃をあたへ攻撃を破摧す」とあり、地元特有の地形も利用して水際での防衛を重視していた事が窺えます。

また、南大浜から真栄里の海岸近くにかけて戦車壕が東西に掘られていたとされていますが、現在は残っていません。



銃眼跡の位置図



A 地点



B 地点



C 地点



D 地点

(3)真栄里宮鳥トーチカ跡 ※車内説明

真栄里海岸から 600m程の内陸部で、2023(令和 5)年にトーチカ跡が発見されました。トーチカとは鉄筋コンクリート等で強固に造られた防御施設のことです。このトーチカは海軍南飛行場の防御施設と考えられます。建物や樹木の影にひっそりと隠れるようにして現存していましたが、当地での建築工事を進めるため現地に残すことが難しく、発掘調査を行って記録保存として後世に遺すことになりました。現在、図書館等で発掘調査報告書、石垣市公式 HP 上で3D動画を閲覧することができます。

トーチカは琉球石灰岩と鉄筋コンクリートを組み合わせて造られており、津波石を利用しているのが特徴です。南側海岸方向に向けた銃眼と、監視用と考えられる小窓が設けられ、屋根の上には余ったセメント袋や石等を被せて補強とカモフラージュをしていたと考えられます。出入口は2か所、内部は8畳程の広さで床面には客土が敷かれ、中央には火を焚いた跡、内壁には棚が5か所設けられていました。

出土遺物はわずかですが、薬莢が1点と砲弾の破片が数点得られており、この遺跡が戦争に関わるものであることを示しています。

3D 動画はコチラ↓



トーチカ跡(南側から)



薬莢出土状況



爆弾を受けめくれ上がった鉄筋と吹き飛んだセメント袋



トーチカ内部の様子

(4)大浜村の忠魂碑

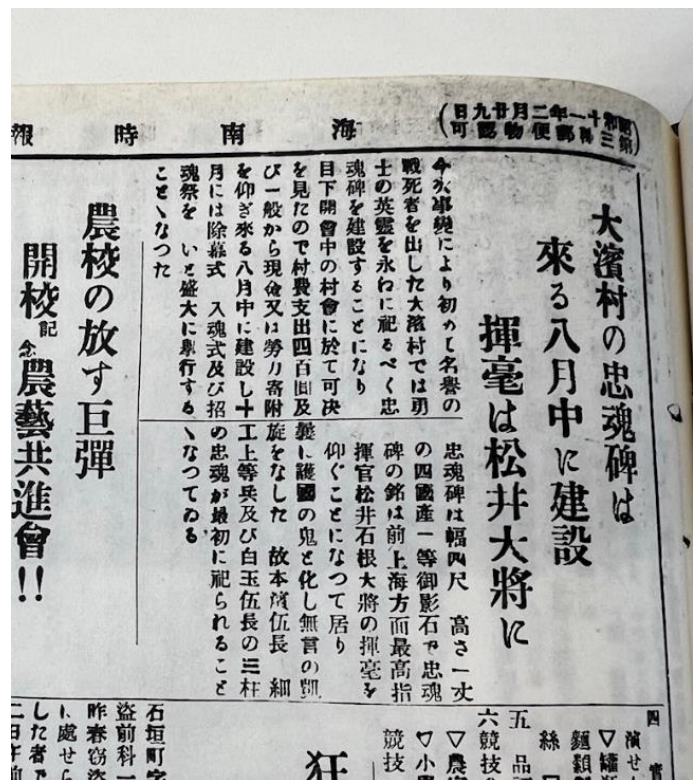
1937(昭和 12)年に開戦した日中戦争での大浜村出身の戦死者 3 名を祀るため、1938(昭和 13)年に大浜尋常高等小学校に隣接して建てられました。

戦争の拡大に伴い、戦死者も多数になると、兵隊を補充するために八重山からも出征することがありました。その際には「新入営」を祝う歓迎会や、「名誉の戦死」を弔う町村葬が催されました。戦況の悪化でさらに件数が増えると、沖縄県の兵事課から「出征勇士の歓送会及び町村葬の節約」が通達され、八重山では 1939(昭和 14)年 3 月に送別会を廃止しました。

この忠魂碑の石材は四国産の花崗岩で、碑本体は鹿児島で作成されました。碑銘は、前上海方面最高指揮官の松井石根陸軍大將が揮毫しました(大浜村出身者が部隊にいたため揮毫を依頼。戦後、南京大虐殺等の責任を問われ処刑されました)。



大浜村の忠魂碑



海南時報(昭和 13 年 3 月 11 日)



Memo

(5) 大浜尋常高等小学校・大浜国民学校

1918(大正 7)年、大浜に大浜尋常高等小学校が設置され、1933(昭和 8)年に台風で全校舎が倒壊した後、現在の沖縄県八重山支庁の場所に移転しました。

1925(大正 14)年の治安維持法の制定、1937(昭和 12)年に日中戦争が勃発、1938(昭和 13)年に国家総動員法の制定と、軍国主義化、皇民化教育が推し進められる中、1941(昭和 16)年 3 月 1 日に「国民学校令」が施行され、大浜尋常高等小学校は 4 月 1 日から「大浜国民学校」となりました。



大浜尋常高等小学校の先生と校舎(昭和初期頃) 八重山写真帖より

終戦までの学校の沿革誌には、「駐屯軍慰問旅行、避難訓練の実施、防空待避所の構築、早起行軍実施、飛行場の奉仕作業出勤、校舎屋根の擬装作業」等の記載があります。

1944(昭和 19)年 9 月から、海軍南飛行場に配置された通称巖部隊が大浜国民学校の職員室を除く全校舎を使用したため、授業は民家や木陰などを利用することを余儀なくされました。1945(昭和 20)年 3～4 月には、校舎が空襲を受け焼失しました。

国民学校とは

国民学校令は「皇国の道に則って初等普通教育を施し、国民の基礎的錬成を行う」ことを目的とし、皇民化教育・軍国主義教育が進められました。標準語の励行、教育勅語の奉読や『臣民の道』が教え込まれました。

標準語励行のため学校で方言を使うことを禁止し、「方言札」が生まれたのもこの頃です。罰として方言を使った者の首にかけ、晒し者にしていました。こうした歴史も、現在方言が消滅の危機にある原因のひとつであると言われています。

(6) 大浜海岸の銃眼 ※車内説明

真栄里海岸の銃眼跡同様に、ガヤシキ浜など大浜の海岸にも、複数の銃眼や塹壕が構築されました。この付近には、海軍警備隊の佐藤部隊が駐屯していました。



銃眼跡位置図



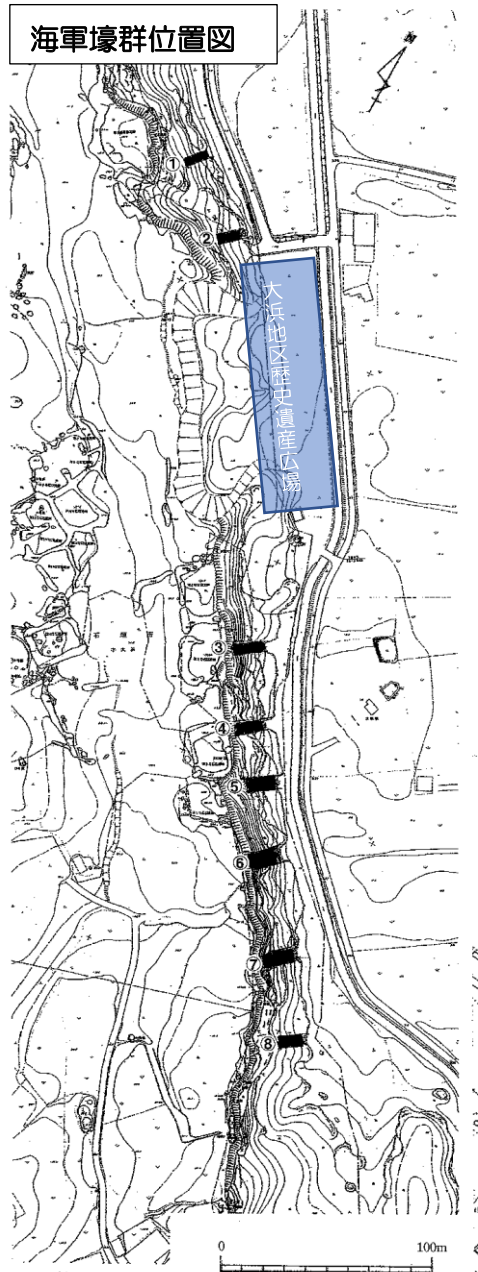
ガヤシキ浜の銃眼

(7)フルスト原の海軍壕群

この海軍壕は、海軍南飛行場の北側、琉球石灰岩段丘の崖下を掘り込み弾薬庫等として使用された壕です。奥行 30～35m 程で、20～30m 間隔で 8 か所確認されています。この壕の構築も、飛行場同様に朝鮮人労働者が従事したとされています。米軍が撮影した当時の航空写真には、壕の入口付近に遮蔽物(爆風等を防ぐためか)が設置されている様子がうかがえます。



海軍壕群位置図

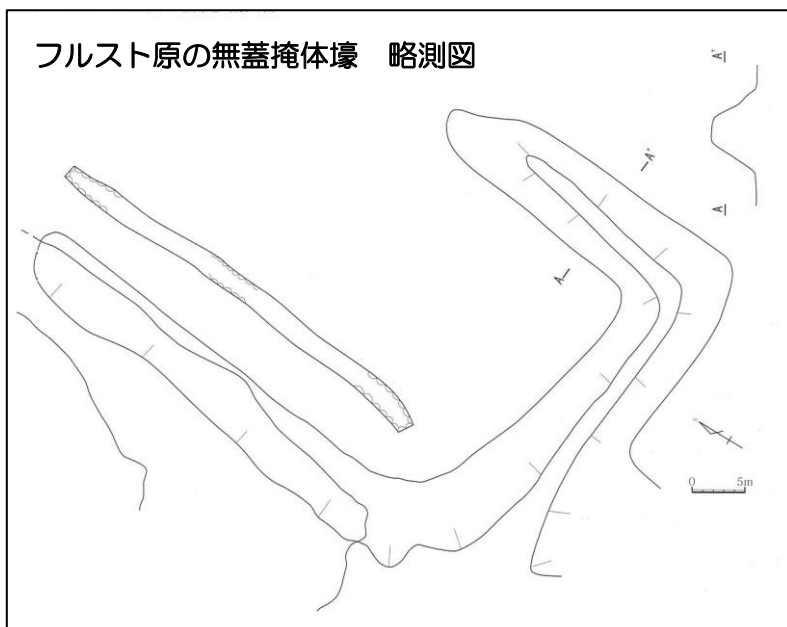


海軍壕群②の様子



フルスト原遺跡の標柱横で見やすい場所にあります。

フルスト原の無蓋掩体壕 略測図



『沖縄県の戦争遺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター)より

(8)フルスト原の無蓋掩体壕 ※車内説明

この掩体壕は、フルスト原遺跡の敷地内に所在しています。掩体壕とは、飛行機の格納庫のことです。土をコの字状に盛って構築されたタイプの掩体壕で、無蓋掩体壕と呼ばれています。

現在では木が生い茂り、一見ただの土手のようにも見えますが、沖縄県内で現存する唯一の無蓋掩体壕とされています。

フルスト原遺跡について

フルスト原遺跡は 14～16 世紀はじめ頃にかけての集落跡で、国の史跡に指定されています。

戦争中には、隣接する海軍南飛行場の滑走路の爆撃痕の補修にフルスト原遺跡の石積を使用したと言われており、遺跡内には掩体壕や誘導路が造られました。戦争によって地域の文化財の姿が失われていった側面もうかがうことができます。

(9)石垣島事件 バンナ岳南麓、海軍警備隊本部跡

海軍警備隊が米軍の捕虜3人を虐殺した事件で、戦後横浜軍事法廷で46人が起訴され、7人が死刑となりました。

1945(昭和20)4月15日、米空母マサッカ・ストレイトから出撃した12機の米軍機によって、石垣島は早朝から空襲を受けていました。大浜に駐屯していた海軍警備隊の佐藤部隊は、大浜沖で撃墜された飛行機からパラシュートで脱出し、岩礁で救助を待っていたティボ中尉(28歳)、ロイド兵曹(24歳)、ダグル兵曹(20歳)ら3人を捕虜としました。彼らはバンナ岳南麓の海軍警備隊本部に連行され、井上勝太郎副司令と憲兵隊長などが立ち合い、尋問が行われました。尋問後の処分は海軍警備隊に一任され、井上乙彦司令は、部隊の指揮の高揚や台湾へ移送する船便がないことなどを理由に、当日のうちに捕虜の処刑を命じました。当時の旅団本部の規則では本来、捕虜の尋問は陸軍が担当し、処置は上部機関の指示を仰いでから台湾へ移送することになっていました。

午後9時過ぎ、震洋隊隊長幕田稔大尉がティボ中尉、第一小隊長田口泰正少尉候補生がロイド兵曹の首を日本刀ではね、甲板士官榎本中尉がはりつけにされたロイド兵曹を銃剣で刺殺したあと、約50人の部下に次々に刺突するよう命じました。惨殺された彼らの遺体は、その日に用意した直径2m、深さ1m程の穴に埋められました。

終戦直後、井上司令は事件の発覚を恐れ、部下に捕虜の遺体の処理を命じ証拠隠滅を図りました。遺体は掘り返され、火葬し骨は西表島近海に散骨、関係者にはかん口令が敷かれました。

1947(昭和22)年、GHQ宛の投書によって事件が発覚。関係者は全員逮捕され、巣鴨刑務所に連行されました。

裁判の第一審では42人に死刑判決が下りました。その中には沖縄出身者8人が含まれ(八重山で現地招集されてわずか2週間の10代の少年3人を含む)、沖縄人連盟などにより減刑嘆願書名運動がなされました。再審では死刑13人、再々審では死刑7人となり、井上司令含む7人の死刑が1950(昭和25)年に執行されました。八重山出身者は2人が重労働5年、1人は執行猶予5年となりました。

井上司令は法廷で、処刑の理由について米軍機の爆撃が市街地を含む無差別爆撃であったことを挙げています。しかし国際的には、捕虜の待遇を定めたジュネーヴ条約で、捕虜の虐待や処刑は認められていません。日本は1929(昭和4)年にこの条約に署名したものの、軍から強い反対意見が出たため、政策を実行に移すことができずにいましたが、太平洋戦争開戦時に条約の順守を表明していたため、これを順守する義務が生じていました。

また、同じ頃に竹富島沖で捕虜になった英兵や陸軍白保飛行場付近で捕虜になった米兵は、陸軍が台湾へ護送し、後に帰国しています。

事件から50年以上たった2001(平成13)年に、当事件で犠牲となった3人の米軍飛行士を祀る慰霊碑が、新川富崎に建立されています。



現場付近に建てられたとっばら一まの歌碑

土地所有者で歌碑を建てた宇部克さんの父親は、別部隊だった
が事件を目撃したという

(10)八重山戦争マラリア犠牲者慰霊之碑・八重守之塔

戦争マラリア犠牲者の遺族が、国に対し謝罪と補償を求める活動を行った結果、1996(平成8)年度慰謝事業費として3億円の国庫予算が認められました(個人に対する補償が行われることはありませんでした)。慰藉事業は沖縄県が行い、①慰霊碑建立等事業(44,791千円)、②八重山平和祈念館建設等事業(144,211千円)、③マラリア慰藉のための死没者資料収集・編纂事業(80,000千円)、④マラリア慰藉のための死没者追悼事業(16,829千円)が実施されました。

この慰霊碑には、遺族によって犠牲者一人ひとりの名前が書かれた石が納められています。

1967(昭和42)年に南方同胞援助会や地元市町の援助、一般住民からの一部寄付により、八重守之塔建立委員会が建立しました。当初、太平洋戦争中に八重山で戦没した670人の霊を祀っており、その後1969(昭和44)年に、八重山市町村会と沖縄遺族連合会によって、日露戦争から太平洋戦争にかけての八重山出身戦没者1,000人余りを合祀しています。

これらの慰霊碑では、毎年慰霊の日に石垣市主催で追悼式典が行われています。



八重山戦争マラリア犠牲者慰霊之碑



八重守之塔

(11)米軍飛行士慰霊碑 車内説明

2001(平成13)年に、石垣島事件で犠牲となった米兵3人を祀る慰霊碑が建立されました。元琉球大学の教授が、八重山で戦争マラリアの調査を行っていた際に、資料で事件について知り、日米に働きかけて慰霊碑建立期成会が発足しました。毎年日米の関係者が参加して慰霊式が行われています。



しょうかんのん ひ
(12)石垣島海軍警備隊聖観音碑 桃林寺境内

石垣島事件で死刑となった井上乙彦海軍警備隊司令の妻、千鶴子が1986(昭和61)年に建立しました。碑には多田静村画伯による聖観音像が描かれ、台座には「怨親平等平和祈願」(怨親平等(おんしんぴょうどう)とは仏教用語で、敵味方を区別しないことを意味します)と、井上司令の辞世の句「石垣島に逝きしこゝだの戦友の遺族思ひをり最後の夜ごろを」と彫られています。

裏面には「太平洋戦争末期沖縄先島作戦中優勢なる敵空軍迎撃封空戦闘に奮戦戦没せし石垣島海軍警備隊将士及び戦傷病死者海軍少佐福田太郎治以下二五六名ならびに所在市民マラリア罹病病没多数の御霊鎮魂供養と世界平和の為怨親平等の聖観音建立寄進す」と刻まれています。



碑が所在する桃林寺は、戦時は金属として梵鐘を供出、隣の権現堂は校舎を接收されていた石垣市国民学校の仮教室として利用されました。



梵鐘の代わりに鐘として使用された 250kg 爆弾の砲弾。

現在も桃林寺境内に残っている。

(13)旧登野城尋常高等小学校の奉安殿 ※車内説明

皇民化教育に伴い、各学校に御真影(天皇の写真)が下賜され、御真影と教育勅語を安置するための奉安殿も造られました。

石垣市内では登野城小学校に現存しており、歴史資料として市の文化財に指定されています。1931(昭和 6)年に造られ、完成後に御真影奉遷式が行われました。御真影は大変尊いものとされ、教師や児童たちが奉安殿の前を通る際は、最敬礼しなければなりませんでした。

構造は鉄筋コンクリート造りで、正面には観音開きの鉄扉があり、内部には御真影を安置するひのき材の棚が残っています。アーチ型屋根の正面に天皇家の菊花紋章のレリーフがあります。1981(昭和 56)年頃、校舎の建替えに伴い、当初の場所から現在の場所に移転しました。

戦後、ほとんどの奉安殿は撤去、解体され、学校敷地に現存する例は僅かです。県内では沖縄市の旧美里尋常高等小学校(沖縄市指定文化財)、本部町の旧謝花尋常小学校跡、宮古島市の旧池間尋常小学校跡にあります。



現在の奉安殿



奉安殿への最敬礼(昭和初期頃) 八重山写真帖より

(14)八重山旅団司令部跡 ※車内説明

1944(昭和 19)年 8 月 23 日、独立混成第 45 旅団が石垣島に移駐し、県立八重山農学校(現八重山農林高校)の校舎を接收し司令部を置きました。翌年の 6 月 10 日、戦局悪化に伴い旅団司令部は於茂登岳山中に移転しました。

移転の際、八重山農学校の校舎と、まだ建って間もない八重山高等女学校の校舎(各町村の献木や奉仕によって 1945(昭和 20)年 3 月に赤瓦校舎が完成したが一度も授業に使われる事がなかった)は解体され建築資材として利用されました。



沖縄県立八重山農学校校舎(1938(昭和 13)年頃) 八重山写真帖より

1945(昭和 20)年 12 月には旅団によって「大東亜戦争陸海軍戦没者合葬碑」が建立されました(海星幼稚園北側)。

陸海軍の戦没者は 670 人、兵士たちの死者数も、マラリア犠牲者が戦闘犠牲者を上回りました。

(15)大浜の掩体壕

※住所は正しくは真栄里です。

この掩体壕は、石垣市役所の北約 600mの場所に所在します。石垣島で現存する唯一の有蓋掩体壕です。この掩体壕はコンクリート製で断面形は半円形、一部、表面のコンクリートが剥がれて中の鉄筋が露出する部分があります。

掩体壕にはこのような有蓋掩体壕や、土を土手のように盛り上げてコの字状に盛り上げた無蓋掩体壕などがあります。1945(昭和 20)年には、こうした掩体壕を 50 機分造ったとされています。



飛行場周辺と大浜集落(1945(昭和 20)年 4 月 30 日) 沖縄県公文書館所蔵

6 おわりに

終戦後もしばらくは、生き残った住民は食糧難や労働力不足(戦争で男性が減少)、治安の悪化等に苦しみ、復興に時間を要しました。

今年は戦後 80 年という節目の年です。事実を直接語り継ぐことができる戦争体験者は年々減り、避難壕や陣地などの戦争の痕跡は、当時の姿を失いつつあります。

未来を見据えて私達にできることはなんでしょうか。

今回の戦跡めぐりへの参加で感じたこと、考えたこと、今日で終わらず戦争に関する書籍や展示なども通して、是非振り返り、戦争や平和について考えていただければ幸いです。

戦争遺跡見学にあたっての注意事項

戦争遺跡は海岸沿いにあるものや指定文化財以外は私有地内であることが多く、また崩落やハブ等の危険もあるため、土地所有者や安全に配慮し、むやみに立ち入らないようにしましょう。

引用・参考文献等

- ・石垣市市史編集室 1985 『市民の戦時・戦後体験記録 第三集 -あのころわたしは-』
- ・石垣市市史編集室 1996 『平和祈念ガイドブック ひびけ平和の鐘』
- ・石垣市市史編集室 2001 『八重山写真帖-20 世紀のわだち-』 上巻
- ・石垣市教育委員会 2014 『石垣市の文化財』
- ・大田静男 2000 『八重山の戦争』 南山舎
- ・大浜公民館 2001 『大浜村誌』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター2006 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(IV)-八重山諸島編-』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 41 集
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター2015 『沖縄県の戦争遺跡-平成 22～26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書-』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
- ・財団法人 南西地域産業活性化センター平成 16 『旧軍飛行場用地問題調査・検討 報告書』
- ・瀬名波栄 1970 『石垣島防衛戦史』
- ・沖縄県教育委員会「指定戦争遺跡一覧(令和 6 年 4 月現在)」
- ・文部科学省 「学制百年史」戦時下の教育
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317570.htm
- ・TBS NEWS DIG NO WAR プロジェクト「ある BC 級戦犯の遺書」連載記事
<https://newsdig.tbs.co.jp/articles/-/642655?display=1>

